

Nara Women's University

『アメリカの夢』論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部 欧米言語文化学会 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹本,憲昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/3927

『アメリカの夢』論

竹 本 憲 昭

『アメリカの夢』は、1965年に刊行されたノーマン・メイラーの第四長編小説である。第三長編『鹿の園』が1955年刊行なので、十年ぶりの長編発表であった。この時点までのメイラーの執筆活動を振り返ってみよう。第一長編『裸者と死者』(1948)がベストセラーとなり、同時に高い文学的評価も得て、作家としてはなばなくデビューしたメイラーであったが、第二長編『バーバリの岸辺』(1951)は高まっていた周囲の期待に沿う出来ばえの作品ではなく、『鹿の園』もやはり高い評価を得られなかった。『バーバリの岸辺』では、過度の観念的記述が物語の展開を鈍いものにしてしまった。『鹿の園』は『バーバリの岸辺』ほどではないにせよ、やはり登場人物の観念的なこだわりが、物語の完成度をいくぶん損ねているように思われる。『裸者と死者』が太平洋戦争を舞台として、さまざまなタイプの軍人を巧みに描き分け、ドス・バソス風の技法を用いながらパノラマ的に物語を進行させた、新人にしては手際のよい作品であっただけに、『バーバリの岸辺』と『鹿の園』のぎこちなさは、なおさら目立った。

しかしメイラーにいわせれば、彼の最高傑作とされる『裸者と死者』は、自分らしさが出ていない、他人が書いたような作品である。メイラーの愛好者もまた、メイラーらしい作品をより高く評価し、『裸者と死者』に対する愛着は比較的乏しいようだ。メイラーらしさは、『バーバリの岸辺』で強く打ち出された観念性と深く関わるものだが、それが端的に表明されたのはエッセイ「白いニグロ」(1957)においてである。黒人を白人に欠けた本能的な力の持ち主と見立て、その本能的な力を行使して体制に反逆する存在「ヒップスター」を、メイラーは賞揚した。性(セックス)と暴力(バイオレンス)において強者であることが、現代のアメリカ人に望まれるのだ。

性と暴力の強者を賞揚することそれ自体はさほど観念的ではないが、そこに「神」や「悪魔」という宗教的な存在が導入されるとき観念性は増す。メイラー

にいわせれば、ヒップスターは悪魔的な存在で、つまり悪党なのだが、それでも神にも悪魔にも縁のない体制に取りこまれた凡人（スクウェア）に比べれば、はるかに生きている意味がある。神と悪魔は場合によっては入れ替わり可能で、ヒップスターは単なる悪党にとどまらず、腐敗した社会を壊乱することによって、英雄になりうるのだ。善と悪とのマニ教的二元論を独自の色で染めたこのような思想が、作者メイラーのバックボーンとなっており、作品によって濃淡の差はあるが、小説のみならずルポルタージュ、エッセイにおいても、独特の味わいが愛読者たちを魅了してきた。しかし、メイラーの思想を前面に出すことと、小説の物語性を高めることは両立しがたく、『鹿の園』のあとメイラーは「白いニグロ」をはじめとするエッセイなどの文章を積極的に発表するものの、小説を公刊することからは遠ざかってしまう。

さて、十年ぶりの新作長編小説『アメリカの夢』はどうかだったのだろうか。結論からいえば、この作品においてもメイラーの思想が前面に出ており、物語の完成度は高くない。付言しておく、その後、断続的に発表された長編小説のいずれも、物語の完成度において見るべきものはなく、小説らしい小説が発表されることはなかった。しかし、『アメリカの夢』の評価はかなり高い。全く評価しない研究者もいるが、少なくともメイラーという作家に何らかの魅力を感じる研究者の間では、この小説はメイラーの全作品のなかでトップクラスのものとして位置づけられている。それは、『アメリカの夢』がメイラーの思想を最も説得力あるかたちで提示しえた小説であるからなのだろう。

とりわけ、バリー・H・リーズのこの作品に対する評価はめざましい。リーズは1969年にメイラー研究書 *The Structured Vision of Norman Mailer* を刊行し、『アメリカの夢』の価値を早くから特筆しているが、それにとどまらず、メイラーの70年代以降の作品を対象にした研究書 *The Enduring Vision of Norman Mailer* (2002) においては、後続の作品を『アメリカの夢』と比較しながら検討しており、この研究書は実質的には『アメリカの夢』の研究書であるようにさえ見える。リチャード・ボワリエは、「メイラーの書いた作品群はひとつの大作と考えるのが最もよい」と述べている。¹ リーズは *The Enduring Vision of Norman Mailer* のイントロダクションで、このボワリエの発言を引用して、

1 Richard Poirier, *Norman Mailer* (New York: Viking, 1972) 3.

「もし、私が信じているように、これが本当ならば、この巨大な作品の中心は疑いなく『アメリカの夢』である」と断言する。²

ポワリエの発言にも一理あることは認めざるを得ない。メイラーの書いたものすべてをひとつの大作と考えない場合、単独では面白く読むことのできない作品がかなりあるからである。大半が日本語に翻訳されているメイラーの小説の中で、いまだに邦訳のない『古代の夕べ』（1983）はその一例である。『なぜぼくらはヴェトナムへ行くのか？』（1967）は、実験的な文体で書かれた、見るべきところの多い非凡な作品であるけれども、『アメリカの夢』や「白いニグロ」など、メイラーの他の作品を読んでいない読者にとっては、解釈が難しい。

それでは『アメリカの夢』も、メイラーの他の作品を読まない限り、面白く読むことができないのだろうか。もしそうだとすれば、一冊の完結した小説として、高い評価を与えられるべきものなのだろうか。小説はエッセイや評論と違って、作者の思想を表明するための道具にとどまることができないような性質を持っている。作者が書き進めていくにつれて、キャラクターが独自の生命を持ち、ストーリーに流れができて、作者といえども作品の展開を必ずしもコントロールすることができなくなってしまうものだ。むろん、作家にも様々なタイプがあり、できるだけコントロールしようとする者と、そうでない者に分かれるが、メイラーは後者に属するといえるだろう。コントロール自体が、メイラーにとっては撃つべき敵なのだから。

『アメリカの夢』には、メイラーの思想に抵抗する要素や、それと無縁な要素がいくつか認められる。そして、そのような要素がこの作品を実り豊かにしているように思われる。本論では、『アメリカの夢』をメイラーの他の作品と切り離し、一冊の完結した長編小説として検討していきたい。

この作品は物語としては起伏に富んだものではない。殺人という大きな事件が物語の発端ではあるけれども、粗筋は比較的簡単にまとめられる。主人公ロージャックは半ば衝動的に妻デボラを殺し、デボラが雇っているメイドのルータ

2 Barry H. Leeds, *The Enduring Vision of Norman Mailer* (Bainbridge Island: Pleasure Boat Studio, 2002) 16.

と情を交わしたあと、妻の死体を十二階の部屋から路上へ投下し、警察に事故だと通報する。ロージャックは、ロボーツを中心とした刑事たちに取り調べられるが、投下された直後の死体に接触したクルマに乗っていた歌手チェリーと親しくなる。刑事はロージャックがデボラを殺したと推察しているが、デボラの父で闇の世界の権力者ケリーがロージャックの罪を法で裁くのを拒んだとみえ、おそらく彼の力によってロージャックは釈放される。チェリーが歌っている酒場に足を運んだロージャックは、彼女と急速に恋仲になり、床をともにする。チェリーの元恋人、黒人歌手のシェイゴが姿を現すが、ロージャックは彼を退ける。その後、ロージャックは非常に恐れていたケリーと対決し、勝利をおさめてチェリーのところに戻ってくるが、シェイゴの友人に殴られたチェリーは息を引き取る。

この筋立ては、セックスとバイオレンスに染められた通俗的なもののように感じられるかもしれない。また、主要登場人物たちは、ロージャックにせよ、デボラにせよ、ケリーにせよ、かなり特殊な人間である。そして作品全体に、魔術的、超自然的な雰囲気が漂っている。それでは『アメリカの夢』はリアリスティックでないのかといえば、必ずしもそうではない。現実の世界で起こりえないようなことは起こっていないし、ご都合主義的な展開も認められない。

主人公ロージャックの一人称小説であるため、この作品は彼の主観世界を提示しているが、その世界はかなり偏向を有しながらも一貫性を持っており、曖昧でありつつ、理解不能であるほど乱れていない。その一貫性は、作者メイラーの思想を反映しているが、メイラーの他の著作を知らない読者も、ロージャックの描かれ方を通して、作者の思いを窺い知ることができる。ロージャックが一貫してこだわるのは、命懸けの挑戦をするための勇気である。生きるか死ぬかの戦い、それなくしては人生そのものに意味がないと彼は考える。したがって彼は、法律を超え、一般的な倫理観を投げ捨ててまでも、危険に直面しようとする。それは極端に言えば、人間でなくなることに等しい。彼は人間であることをやめて、悪魔もしくは野獣になることを志向しているようにも思われる。

ロージャックがデボラを殺しながら罰されることがないのは、常識的に考えれば不当である。またロージャックに肩入れしていることが明らかな作者メイラーは、殺人を正当化していると思なされても仕方がない。ただしメイラーは、

すべての殺人を正当化しようとしているわけではない。メイラーの、そしてロージャックの信念には武士道と似たところがあって、自分の命を懸けることを前提に、つまり自分を倒しうる強い敵を相手に、勝負をすることが重視される。したがって『アメリカの夢』では人権は踏みにじられることが多いのだが、それを非難してもあまり意義はない。そもそも現実の社会において、人権が踏みにじられることは珍しくない。それに対して、毒をもって毒を制するかたちで立ち向かうのがメイラーの流儀であり、武士の仇討に通じるところもある。

『アメリカの夢』が発表された1960年代は、公民権運動が高まり、大学で紛争が起こった、政治の時代、反逆の季節であった。過激派は人権を無視しようとする体制に対して、暴力をもって立ち向かおうとした。『アメリカの夢』はそのような世相と響き合う内容を持った作品なのである。それだけに発表当時魅力的に見えたものが、いまとなっては色褪せてしまったように思われるところもあるだろう。メイラーの熱のこもった、さらには熱に浮かされたような文体も、距離をおいて醒めた目で見つめることが容易になってきた。具体的にいえば、1960年代のラディカリズムを若気の至りとして批判しうるのと同じように、メイラーが正当化するロージャックの生き様を、不幸なものとして退けることが可能である。むしろ、メイラーにとって幸福であることはそれほど大きな意味を持ちはしないだろう。しかし読者にとってはそうではない。一口に幸福といっても、様々な種類のものが考えられるが、さしあたり日常的かつ小市民的な、メイラーが最もさげすみそうな幸福を想定してもよい。そのような幸福は、足が地についていることによって保証される。

『アメリカの夢』の登場人物は、大半が日常的な幸福とは縁のない特殊な連中であるが、特にケリーと娘のデボラは、文字通り足が地についていないことが強調される。この親子は、それぞれ高いところに居住しているのである。空間の高さは、地位の高さに通じている。舞台がニューヨークであるだけに、超高層ビルも珍しくはないが、この作品ではビルの高いところから何かを下へ落とす行為が、数度形を変えて反復される。まずはロージャックが、パーティの催されている友人宅で嘔吐する。十一階のバルコニーから反吐を落下させるのだ。その直後、彼は満月を見つめて、月から語りかけられるのを感じる。ロージャックは第二次大戦の折、ドイツ兵を四人殺しているが、それが満月のもと

でのことであったため、彼にとって満月は死を連想させるものとなった。一般に月は狂気を招くものと捉えられることもあり、また狼男のように、人間を野獣に変身させるものというイメージもある。『アメリカの夢』では、満月は死へと至る狂気や獣性を呼び起こす天体として表現されており、嘔吐のちに月を見つめて、ロージャックは生々しい自分の存在を感じ取る。余分なものは反吐として吐き出され、本来的なものだけが残されたことを、月の光によって認識させられるのだ。

さらに、月は彼自身がバルコニーから飛び立つことを促す。月に向かって鳥のごとく飛ぶことが可能であるかのように。

私は自分が飛ぶだろうと知っていたから。私の体は袋のように落ちるだろう。下方へと、服、骨、そして何もかも入ったカバンが。語り、考え、自分の存在の風景をちらりと見た私の一部分が舞い上がり、上昇し、何マイルもの闇を跳び越えて、月へ向かうだろう。ライオンのように、私は過去の軍団に加入して、彼らの力を共有するだろう。「さあ来い」と月が言った。「いまこそ君の契機だ。飛ぶのはなんと喜ばしいことか。」そして私は実際に一方の手を離した。左手を。本能が私に死ぬように命じた。³

しかしロージャックは死なない。本能は人に死ぬように命じたりはしないものである。ロージャックが本能と呼ぶものは、実は恐怖心の裏返しに過ぎないだろう。怖いからこそ、あえて無鉄砲な姿勢で死につながるものに直面することによって、自分が何やら特別な人間であるかのように思い込もうとするのだが、それは甘美な錯覚である。

ロージャックは自ら命を絶つことを恐れているが、さらに恐ろしいのは他人から命を取られることであり、デボラを殺したあと彼女の父ケリーに会うことに大きな抵抗を感じるの、ケリーが彼を殺しかねないからであった。実際、ロージャックが警察から保釈されたことには、彼を自分の手で罰しようとするケリーの意思が働いている可能性が高い。

3 Norman Mailer, *An American Dream* (1965; Herts: Granada, 1972) 19. 以下、引用は本文中にページ数のみ示す。

そもそもデボラを殺したのも、さもなくば彼女に支配されるからであり、それは自分にとって精神的な死に等しいと、ロージャックは考えているようだが、精神的な死を実際の死と同一視するのは避けたい。デボラとの身体的な戦いは結局デボラを死なせることになったけれども、どれだけロージャックがデボラの身体的な強さをアピールして、死闘がフェアなものだったと訴えようとしても、説得力に欠ける。やはり勝算があったはずのロージャックが、命懸けでデボラと戦ったとは認めがたい。その負い目が、デボラを殺したあとの彼の行動を自暴自棄なものにしているように思われる。行き当たりばったりに動くロージャックの内面も、命懸けの挑戦をするための勇気を奮い起こそうとするところは一貫している。デボラとの戦いが、実際には命懸けでなかったことを心の底で知っているからこそ、本当に命懸けの行為を彼は求めようとする。この一貫性が軸とはなるが、それを除けばロージャックの内面は、その場限りの気分的なものを理屈めかしたにすぎず、それほど信をおくことができない。

ともあれ、友人宅における高層からの嘔吐は、デボラを殺したあと、その死体を投下することの先駆けとなるのだが、十階以上の高さから落とすという点が共通している。ロージャックと別居しているデボラの住む豪華なマンションは、上下二階分から成る重層型で、下の階にはメイドのルータ、上の階にはデボラがいるというのは、あからさまに二人の女性の上下関係を示すものである。ロージャックはデボラを殺した直後、ルータと情を交わす。のちに引き返してデボラの死体を投下し、さらに再びルータに会って妻が自殺したと嘘をつく。このように彼は、階上と階下を往復している。そして最後に、ルータのいる階からエレベーターを使わず、階段を急いで下りていく様子が以下のように描かれる。「十階分の階段を降りるのは、今夜はこれが二度目である。しかし今回は急ぎ足だった。」(59) (この記述から、ルータがいたのが十一階、デボラがいたのが十二階であることが分かる。) ロージャックはあえて階段を下りることを選択するのだが、彼は足が地についていないことの不幸を、心の片隅で感じているのではないだろうか。

嘔吐とデボラの死体の投下を繋げると、デボラはロージャックにとって汚物並みの存在だったと考えることもできよう。しかし、デボラは決して汚物としてのみ片付けられるような存在ではなかった。別居しているとはいえ、ロージャック

クは彼女に対する愛情を完全に失っていたわけではない。愛憎が複雑に絡まった感情が、両者に共有されていたと思われる。愛と憎しみの間を往来する二人の情が、憎しみの側に大きく振れたはずみに、ロージャックは殺意を固めてデボラを扼殺したのである。デボラを殺したあと、彼は死体を即座に投下しなかった。ルータとの情交は、デボラの相対化に役立ったはずだ。デボラに対する情を断ち切り、死体を汚物並みに路上へ投下するための勢いが、ルータとのセックスとアナル・セックスから得られている。特にアナル・セックスが異常な行為であることが強調され、死体投下の異常性に連結していく。また、ロージャックが皮肉にもきれいに拭ったあとで汚物並みに投下したデボラの死体は、その顔がクルマに轢かれて、さらに汚物度を増す。ロージャックはそれを以下のよう

私は検屍官の前に出て膝をつき、彼女の顔を見た。それはこすれたアスファルトとタイヤの跡で汚くなっていた。彼女の半分だけが、彼女のものと認識できた。タイヤに轢かれた側がふくれ上がっていたからだ。彼女は太った若い娘のように見えた。しかし彼女の後頭部は、腐って果汁に浸った果物のように、直径一メートルに近い凝固した血の池の中心となっていた。
(61)

高所に対するロージャックのコンプレックスが、デボラの死体を路上へ投下させ、生きているときには驕り高ぶっていた妻も、死んでしまえば汚物に等しいことを強調させている。高所であって、ロージャックはさらに高い月を目指しつつ、同時に地上に落下することを覚悟していた。しかし自分が落下することには抵抗があるので、代わりに何かを落下させるのだ。

デボラの死体が警察によって調べられ、ロージャックは連行されて、しばらく尋問を受ける。意外にも、主としてロージャックを取り調べるロバーツを筆頭に、刑事たちは真っ当な職業人として、むしろ好意的に描かれている。彼らの地道な捜査は、ロージャック、デボラ、ケリーなど主要登場人物の、地に足がついていない生活と対照的だ。ロバーツはロージャックが妻を殺したと確信しており、彼に自白を促そうとする。しかし、彼はロージャックに対してある

程度の敬意をもって接しており、刑を軽くするための現実的な方策を彼に示しさえする。あまつさえ、一時的な精神障害を申し立てて、法的責任を免れる可能性まで示唆している。ロージャックの殺人が結果的に罪を問われることがなかった点で、大いに物議をかもした『アメリカの夢』だが、もしロージャックがロバーツの勧めにしたがって現実的に対処し、最も軽い刑罰を受けたとするならば、殺人の罪が問われないことを理由にこの作品を批判する読者は、果たして満足するのだろうか。

現実的には、人ひとりを殺しても、殺人者が死刑や終身刑を言い渡されることは滅多にない。命懸けの戦いを推奨するメイラーには、そうした現実の司法制度は、生ぬるいものには見えないだろう。メイラーのように過激ではなくても、法とは違ったかたちでロージャックが殺人の報いを受けることを期待する読者は、必ずしも少なくはあるまい。生ぬるい法的制裁よりも厳しい試練に直面させるために、ロージャックが釈放されると考えるならば、彼の釈放自体は読者にとって納得のいかない物語の展開ではない。デボラの死体が発見された現場に居合わせたチェリーの連れのエディ・ガヌーチが、かねて警察のマークしていた大物の悪党であったため、警察がロージャックの取り調べを二次に考えざるをえないという事情が生じている。また、おそらくはケリーの巨大な力が作用していると推測できるから、ロージャックをより厳しい試練に向かわせるために、作者メイラーが強引な展開をご都合主義的に推し進めているとさえいえないだろう。真っ当な刑事ロバーツにとってみれば、やり切れないことなのだが、このように大きな力が作用して、クロであることの明らかな容疑者が法の網をくぐり抜けていくのは、現実社会においても決して珍しいことではない。ただ、多くの読者にとって不満が残るのは、期待されたさらに厳しいものであるはずの試練を、ロージャックがあっさりと乗り越えてしまうことであり、結果的には、その試練が大したものに見えないのである。

試練とはロージャックにとっての大敵ケリーとの対決であるが、その前哨戦のようなかたちで、彼はシェイゴと争う。シェイゴとの争いは、ロージャックにとって多義的な試練である。単に強敵と命懸けで戦うというだけではない。ロージャックとシェイゴが敵対するのは、チェリーをめぐるのことであるが、シェイゴが黒人であることが、この争いを意義深いものになっている。リーズも

この争いをとりわけ重視して、詳細に検討しており、「白いニグロ」との関連においてシェイゴが分析される。リーズは「しかしロージャックを、メイラーにとってアメリカの実存主義者を具現したものとして、最も明快に定義づけるのは、彼とシェイゴ・マーチンの関係である」と述べて、「白いニグロ」を引き合いに出し、このエッセイにおいてメイラーが賞揚してやまない実存主義的ヒーローのヒップスターに見られる、麻薬や俗語の使用など、反逆的な要素に注目する。⁴ リーズはさらに、シェイゴにも共有されているそのような反逆的要素が、争いを通してロージャックに転移すると考え、以下のように結論づける。

ロージャックは実際に白いニグロになったのだ。この変身が、バーニー・ケリーという最も強く邪悪なロージャックの敵との対決の直前に起こるのは、偶然ではない。シェイゴから引き出された力は（シェイゴは黒人の最高の長所と力を表しているので）、ロージャックの勝利のためには必要だからである。⁵

リーズの主張には、それなりの説得力があり、ロージャックがシェイゴとの争いを通して、ケリーに立ち向かうための力を高めたことは間違いないだろう。それを象徴するのが、シェイゴの残していった、剣にもたえられる男根的な傘である。ロージャックはこの傘を携えてケリーのマンションに向かうのだが、この傘がシェイゴの力をケリーに与えると考えているのは、リーズだけではない。この傘に魔力を認めるトニー・タナーは、「ロージャックが携えて行くシェイゴ・マーチンの傘は、彼の膝の上でピクピク動き、信号を発しているように見える。テレパシーとアニミズムは、ハーレムでは珍しくない」と述べている。⁶

しかし、シェイゴは本当にそれほど大きな力を持っているのだろうか。それにしては、あまりにもあっけなくロージャックに退けられているように思われ

4 Leeds, *The Structured Vision of Norman Mailer* (New York: New York UP, 1969) 147.

5 *Ibid.*, 148.

6 Tony Tanner, *City of Words: American Fiction 1950-1970* (1971; London: Jonathan Cape, 1976) 362.

る。シェイゴは歌手として名も知れており、もともとチェリーの妹とつきあってきた。当時シェイゴには、ニューヨークだけで六人の情人がおり、チェリーの妹はそのうちの一人にすぎなかった。彼が精力絶倫であることは、それなりに強調されているけれども、それは白いニグロであるヒップスターが模範とする黒人特有の精力に由来すると、単純に考えることはできない。シェイゴは黒人だからセックス・アピールを有しているというよりも、名の知れた芸能人であるから女性が群がってくると考えるほうが自然である。そして、そのような芸能人は艶福家として羨まれこそすれ、必ずしも恐ろしい敵とはいえない。シェイゴにはハーレムで愚連隊に属していた時期もあったが、いまや彼は芸能人として活躍しており、名声を守るためにも慎重な行動をとるのが普通であろう。しかし、ロージャックは彼をハーレムの主に見立てて、必要以上に恐れるのである。

ロージャックの前に姿を現したシェイゴは、意外なことに有名な芸能人らしくふるまわない。またロージャックは、対決する相手を強大な存在と認めることによって、戦いの価値を高めようとしているため、シェイゴの姿を正しく捉えることができていない。ナイフをちらつかせて脅迫するシェイゴは、ハーレムの主とはほど遠い、単なるチンピラのようなものである。有名人の行動としては慎重さを欠いたものだが、冷静に考えれば、彼はナイフを脅しに用いているだけで、実際は刺したりはしないであろうことが分かるはずだ。しかしロージャックにはその冷静さが無い。あえて冷静さを抑えこみ、熱に浮かされたように、シェイゴを凶悪な敵と認識しようとする。刺されるかもしれないナイフをものともせず、敵に立ち向かうことによって、ロージャックは恐怖を克服し、その勇気を白贖する。シェイゴも彼を褒めてくれる。ここでしばらくは、二人の間に友好的な言葉が交わされるのだが、この成り行きも醒めた日で見れば、不良同士が殴り合ったあと仲良くなるのに似て、たわいがない。

シェイゴがチェリーを侮辱する言葉を吐いたのが弾みとなって、今度はロージャックがシェイゴを攻撃するが、背を向けた相手への攻撃は不意打ちにほかならず、卑怯でさえある。ロージャックは以下のように、シェイゴの体を抱え上げて、落下させる。

私は腕を彼の腰にまわして後ろから抱え、彼を宙に持ち上げて、床に強く投げ下ろしたので、彼の脚は支えきれず、結局シェイゴは座った姿勢となり、背後の私は膝をついた。私が彼を持ち上げて投げ下ろし、そして再び持ち上げて投げ下ろすとき、私の腕は彼の胸が息を吐くのを妨げた。「放せ。殺してやる。オカマ野郎」と彼は叫んだ。そして放すことのできた瞬間もあった。彼を放し、立たせ、戦うという選択肢もあった。しかし私は彼の声の中に聞き取ったものを恐れた。それは赤ん坊の声の中に聞き取れる地の果てからの泣き声のようだった。私は怒りに駆られた。私は幾度となく彼を持ち上げてはドスンと投げ下ろした。十度、十五度、二十度だったかもしれない。私は乱れていた。彼を床に叩きつけるたびに、暴力が彼から解き放たれて私の中に入ってくるように思われた。私は彼の尾髄骨を床に何度も叩きつけ、その衝撃は彼の頭へ上っていった。私は自分がこれほど強いとは思ってもみなかった。強さ自体に興奮していた。そして彼がぐったりしたので私は放した。後ろに下がると、彼も後ろに倒れ、木から落ちるリングのように鈍い音をたて、彼の後頭部が床を打った。(181-82)

ヒップスターにふさわしい颯爽とした戦いからは程遠い。リーズは興味深いことに、二人の戦いから同性愛的なものを読み取ろうとしている。「ロージャックがシェイゴを打ち負かすときの身体の位置と、シェイゴが用いる罵り言葉は、同性愛的な触れ合いを強く暗示しており、無視することはできない」とリーズは述べる。⁷ シェイゴの用いる罵り言葉としてリーズが挙げているのが、“up your ass”と“bugger”であり、後者は先の引用で「オカマ野郎」と訳出した。“up your ass”は“stuff it up your ass”に等しく、「そいつをおまえの尻に突っ込め」となる。“bugger”の原義は、「アナル・セックスをする者」である。しかしリーズも認めているように、どちらの言葉も本来の意味から離れて、単なる強い罵り言葉として用いられることが多い。それだけにこれらの言葉は、二人

7 Leeds, *The Structured Vision of Norman Mailer*, 140-41. なお、ロージャックにエディプス・コンプレックスを認めて、彼がデボラやチェリーを母として見ていると主張するアンドリュー・ゴードンも、この場面におけるロージャックの身体の位置から、同性愛的なものを読み取っている。Andrew Gordon, *An American Dreamer: A Psychoanalytic Study of the Fiction of Norman Mailer* (Rutherford: Fairleigh Dickinson UP, 1980) 160.

の同性愛的な関係を示す証拠としては弱いだろう。後ろから抱き上げるロージャックを男色者に見立てることはできるが、それはあくまでも見立てにすぎず、実際に同性愛的感情を両者が共有しているとは考えにくい。シェイゴは、ロージャックを男色者に見立てて、「オカマ野郎」と罵るが、それはむしろロージャックの卑怯なふるまいを責めているととるのが適切であるように思われる。

ロージャックはシェイゴを宙に持ち上げて床に落とす行為を何度も繰り返したのち、階段の上から下へ落とすことによって彼を退ける。スラム街にあるチェリーのアパートは、デボラやケリーの住むマンションとは対照的なみすぼらしい建物であるが、それでも彼女の部屋は六階という比較的高いところに位置している。その六階から一階まで、ロージャックはシェイゴを執拗に落としていくのだ。十一階からの嘔吐を「起」、十二階からのデボラの死体投下を「承」とすれば、シェイゴを階段から落とす行為は「転」に相当する。(そして、三十数階におけるケリーとの対決が「結」となり、起承転結の形が整う。)「起」と「承」では、高級マンションの高所から、物体を地面に向けて投下している。ロージャックの体から吐き出された物も、生命を失ったデボラの死体も、いずれも人間に無関係ではないが、物体にすぎない。それに対して、「転」で落とされるシェイゴは生きた人間であり、六階から直接地面へ投下されるのではなく、階段に接したかたちで落ちていく。落とされて負傷はするものの、死にはしない。

シェイゴの落下が階段に接したもので、また六階という中途半端な高さからであることは、彼の人種や地位と無関係ではない。黒人であることが制約となり、シェイゴが歌手としていくら人気を獲得しようと、上りつめることのできる高さには限りがあることを、彼が元の恋人に会うために上ってきたこの六階という高さは示しているようだ。六という数字は、『アメリカの夢』が発表された 60 年代と結びつくと見るのは恣意的かもしれない。しかし、60 年代における公民権運動は、黒人に地位向上をある程度実現した。そのある程度が、六十階ならぬ六階という中途半端な高さに表されていると考えるのも一興である。黒人歌手マイケル・ジャクソンがトップ・スターとなる 80 年代や、オバマが黒人として初の大統領となる 21 世紀は、まだまだ先のことなのだ。ちなみに、十二階のデボラや三十数階のケリーは、ワズプではなくアイルランド系

だが、この高みは明らかに、作中でも名前の出てくるアイルランド系のジョン・F・ケネディが達成したものを反映している。

『アメリカの夢』が、ケネディ暗殺を強く意識して書かれた小説であることは、すでに指摘されている。この作品に対して批判的なフランク・D・マッコネルは、以下のように述べている。

実際、『アメリカの夢』はケネディ暗殺の鏡像を形づくっている。というのも、抑圧された暴力の悪夢的な力が、輝くばかりに成功しているケネディに対し、彼の意に反して解き放たれたとすれば、メイラーはロージャックの物語において、同様に成功している男が自ら望んで、同じ精神的混乱に沈んでいく姿を、私たちに示しているのだ。その混乱が私たちの人生の足元にあることは、暗黙に了解されている。⁸

マイケル・K・グレンデイは、マッコネルの指摘が貴重であることを認めつつ、ケリーのミドルネームがオズワルドという、ケネディを暗殺したとされる男の姓に等しいものであることを考慮して、ケリーに挑むロージャックを肯定的に見ようとする。「私たちは、ロージャックを、彼の暴力や超自然主義や標準的議論の拒絶を、一人のアメリカ作家による国家的なむかつきに対しての最初の並外れた返答と見なす必要がある」と、グレンデイは語気を強めて主張している。⁹ しかしケリーのミドルネームがオズワルドであるからといって、彼をリー・ハーベイ・オズワルドと同一視するのは単純すぎるだろう。たしかに闇の世界に君臨するケリーには、暗殺者と関わりを持ちうる側面が認められるけれども、彼は実行犯として直接手を下すような小物ではない。オズワルドというミドルネームは彼に秘められた魔性を示唆してはいるが、アイルランド系の権力者というところは、ケネディと共通している。逆に、実際に人を殺したロージャックのほうが、リー・ハーベイ・オズワルドに近いと見ることもできよう。

「転」の部においてシェイゴが階段から落とされたのが、六階分の高さであったのと対照的に、「結」の部でロージャックとケリーが対決するのは三十数階

8 Frank D. McConnell, *Four Postwar American Novelists* (Chicago: U of Chicago P, 1977) 96.

9 Michael K. Glenday, *Norman Mailer* (New York: St. Martin's, 1995) 91.

という、五倍以上の高みにおいてである。しかし、「結」でロージャックが三十数階のバルコニーから落とすのが、ケリーを打ちすえるのに用いたシェイゴの傘であるという点において、「転」と「結」がつながっている。ところで、ケリーとの対決にあたって強調されるのは、ケリー自身ではなく、三十数階の高さに挑んでいる点である。ロージャックはバルコニーの欄干に立ち、そこを歩くという綱渡りにも似た行為によって、ケリーに対する恐怖を克服しようとするのだ。もちろんこの行為は命懸けであり、それゆえに多くの研究者によって肯定的に受けとめられてきた。また、そのような肯定を促すレトリックを、ロージャックは用いている。この欄干を歩くという行為が、単なる肝試しにとどまらず、あたかもオカルト的に彼自身とチェリーを救うものであるかのように、読者に対して彼は語りかける。しかし冷静に考えると、彼が欄干を歩くことには何の意味もないことがはっきりする。外側に落ちて死んだとしても、デボラを殺したことの償いになるはずもないし、落ちずに歩ききったところで、そのことによって彼の精神的な成長が約束されるとは思えない。

意味のないのは、この欄干歩きに限らない。三十数階という高さや、そこに住むケリーという権力者の存在にも意味はない。すべてが不自然であると、痛感せざるを得ないのではないだろうか。高い地位や高層ビルは、いわゆるアメリカの夢を具現したものであろうけれども、この作品におけるアメリカの夢は、否定的に描かれている。夢を悪夢と読み換えてもよいし、虚しいものと捉えることも可能だろう。ロージャックは意味のないものを、さも重大であるかのように見せかける。彼の用いるレトリックは、ある程度読者を幻惑しているかもしれないが、それにも限界がある。言葉でどれほど虚飾しようと、彼の行為は中途半端なのだ。欄干を歩くにあっても、彼は往復することに重要な意味があると、オカルト的な認識を表明し、往路が彼自身を、復路がチェリーを救うと強調しながらも、往路をたどり終えたところで中断した。復路に行くことがチェリーを救うと信じ切れていなかったからだろう。また彼は、ケリーのいる三十数階へと向かうとき、以下のように、階段を上ろうかと考えながらも断念している。

私はケリーのマンションへ階段を上って行こうかと思った。全部で三十数

階分を。一瞬思ってみただけだが、頭にこびりついた。これが私のすべきことだ、ハーレムに行くのと等価だという気がしていた。しかし、階段を上り始められなかった。(中略)だが階段を歩いて行くほうがよいのは確かだった。恐怖と興奮をくぐって上り、疲れて心臓が痙攣したため挫折し、建物を守る帯状の心霊的磁気をエレベーターで突き抜けることになるとしても。(195)

彼が「起」と「承」で、マンションの十一階から階段で下りたことが思い出されるが、十一階から階段で下りることは、三十数階まで階段で上ることに比べて、それほど困難でも非常識でもない。それにしても、「転」におけるシェイゴを階段から落とす行為も含めて、ロージャックが階段に強いこだわりを持っていることは注目すべきである。階段は、一步一步の地道な努力を表していると解釈しうるだろう。

ロージャックは、欄干を歩くことには文字通り中途半端であったが、階段を上ることは、ただ考えてみただけで、中途どころか一歩も進むことがなかった。(ただし、ケリーのマンションからの帰り道では、中途半端に七階分の非常階段を下り、挫折してその先はエレベーターを使っている。)空虚で派手な行為は試みる気になれても、誰も見ていないところでの地道な努力は願い下げにする。ロージャックとはそのような男なのである。政治家を目指して挫折し、大学教員としてもテレビに出演してタレントを気取る。彼のこれまでの経歴に、能力に見合わない虚名を求める性質がはっきりと認められる。ケリーもロージャック同様、空虚な人間であることが、対決における卑怯な態度とあっけない敗北に見て取れる。ケリーは欄干を歩くロージャックを、シェイゴの傘を用いて突き落とそうとするが、その傘をロージャックに奪われ、傘の柄で顔を一撃される。その一撃でケリーは倒れ、勝負がついてしまうのだ。それまでロージャックが超人的な存在として恐れおののいていた人物にしては、あまりにも無力であり、張子の虎のように思われる。

ケリーが弱すぎたため、いわば楽勝したロージャックに対して、共感できない読者が多くいたとしてもやむをえない。メイラー自身の信条を反映したこの主人公は、作者の意図がどうであれ、語り手としては信のおけぬ、不埒な人物

であることは間違いない。だが、彼の半生に認められる、空虚な高みを目指したネガティブなアメリカの夢は、反面教師的な効果をもつ。そして彼自身、地道な努力が充実した人生に不可欠であると、心の片隅で思っていた。ただ、思っていたが派手な虚飾に目がくらみ、努力をないがしろにしてしまったのである。空虚な高みからの転落は致命的である。ロージャックにはそれがよく分かっているからこそ、自ら転落して不毛な人生を終えようという衝動にも駆られるし、さりとて命が惜しくもあるので、代わりに反吐やデボラの死体やシェイゴの傘を落として、ひとりよがりのレトリックで格好をつけてみる。自分が高みから下りるときには、階段で安全に、地道に下りようとするのだ。

地に足がついていないケリーもデボラも不幸であった。ロージャックは、彼らの君臨する高みに至ろうとして、不幸になった。黒人のシェイゴはハーレムの代表者として、「低さ」が強調されているものの、実際には実力派の歌手であり、足が地についていないわけではない。だから彼は、ロージャックが落とした対象の中では例外的に、階段から落とされている。プア・ホワイトのチェリーにも、シェイゴと同じことがいえるだろう。しかし歌手として実力があっても、芸能は人気に左右される浮草稼業であり、ケリーやガヌーチのような闇の世界の権力者に翻弄されがちである。その危うさが結末における両者の不慮の死に結びつく。チェリーとロージャックの恋を特権的なものとする研究者は多いが、ロージャックのレトリックに幻惑されなければ、彼が単に出会ったばかりの女性の新鮮さに酔っているだけである可能性に思い至るはずだ。彼女はデボラに比べてはるかに御しやすい、ロージャックにとっては都合のよい女性にすぎない。彼は死ぬ間際のチェリーをわざとらしく「妻」と呼ぶが、二人の関係はむろん夫と妻の間にもたれる地道な努力を要するようなものではない。

メイラーが、地に足がついていない人間の不幸を描きたかったとは思えないのだが、結果的に『アメリカの夢』は、そのような作品になっている。ロージャックの高みに上ろうとする意欲と、彼と信条を共有する作者メイラーがこの分身的存在を引っぱり上げようとする企図は、作者のコントロールが及ばない小説の流れによって阻まれている。その流れとは換言すれば、因果応報的な重力であり、十分な支えなくして高みに上る者は、転落せざるをえないということを強調しているのだ。この重力こそが『アメリカの夢』を、作者メイラーの人生

観を表明するための単なる手段に終わらせず、作品に味わいを与えているのではないだろうか。